

**科学研究費助成事業 研究成果報告書**

平成 27 年 6 月 16 日現在

機関番号：13601

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2010～2014

課題番号：22530735

研究課題名(和文) 大学生のメンタルヘルスと発達障害に関する支援ニーズ把握質問紙の開発

研究課題名(英文) Development of support needs questionnaires for students with developmental disabilities.

研究代表者

金子 稔 (KANEKO, Minoru)

信州大学・学術研究院医学系・講師

研究者番号：50571858

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,200,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、これまでメンタルヘルスのスクリーニングに広く用いられてきたUPIの改良版であるUPI-RSと、2種類の発達障害関連のニーズ把握質問紙を統合した短縮版を作成した。短縮版は、UPI-RSから25項目、二つのニーズ把握質問紙から26項目を抽出したものである。高得点者を抽出するルールを作成し、高得点を示した者および相談希望があった学生に連絡を取り、研究代表者である総合健康安全センター医師、カウンセラーが個別面接を行った。発達障害の診断のある学生における得点について検討した結果、発達障害関連の困り感が診断のない学生よりも高いことが明らかになった。

研究成果の概要(英文)：Short forms of self-rating questionnaire were developed to identify the support needs of students with mental health problems, attention-related difficulties, and those with autism spectrum disorders. The total number of items was 51. A rules was developed to pick up students with high scores. The psychiatrist and counselors of the university health center interviewed the students who scored high on the questionnaire and who expressed the needs for counseling. One of the important findings of this study was that those students with diagnosis with ASD showed higher scores on the subscales than those who scored low.

研究分野：精神神経科学

キーワード：発達障害 メンタルヘルス ニーズ調査 大学生 学生支援

## 1. 研究開始当初の背景

日本学生支援機構の調査によれば、発達障害の診断がある学生として大学が把握していた数は年々増加している。高校までに支援を受けながら卒業し、大学後も引き続き支援を求める学生がいる一方、大学進学後に初めて問題が顕在化するケースもある。その理由の一つとして、高校時代の学習や生活と、大学生としての学習や生活が質的に大きく異なっているということがあげられる。

大学への進学率が上昇する一方、休退学者数は高い水準を保って推移している(内田, 2009)。その背景にメンタルヘルスの問題が存在する場合も多く、入学当初にメンタルヘルスのスクリーニングテストであるUPI (University Personality Inventory)を実施する大学も多い。しかしUPIに関しては、スクリーニングテストとしての妥当性が十分ではないとの批判もある(牛, 松井, 山下, 倉知, 2000; 磯田, 1998)。

一般的なメンタルヘルスの問題に加え、近年、大学生でも発達障害が不適應の背景にあるとの報告が目立つようになってきた(西村, 2006 など)。発達障害は「見えにくい障害」であり、周囲の理解のなさは二次的な心理的問題にもつながる。学生が大きな困難に直面することを予防するためにも、早期に問題を把握し、支援につなげることが重要である。

このような状況に置ける学生のみならず、把握するためには、一般的な発達障害の症状を調べるのではなく、大学生活の中でどの程度困っているかの程度である「困り感」を調べる必要がある。発達障害のある学生が直面しがちな困り感を把握するために、報告者らはこれまで、自閉症スペクトラム障害(ASD)と注意欠如多動性障害(ADHD)に関連がある困り感を把握するための質問紙を開発してきた。

## 2. 研究の目的

ASD 困り感質問紙は 25 項目、ADHD 困り感質問紙は 14 項目から構成される、4 件法の自己評定型の質問紙である。信州大学ではこれまでも精神的健康についてはUPI-RS(4 件法評定尺度によるUPI)を用いてスクリーニングを実施していた。この質問紙は 60 項目で構成されており、これに加えて、さらに 39 項目もの質問紙を短時間で多くの学生を対象に実施するには項目数が多すぎる。

60 項目あるUPIはこれまでも短縮尺度の作成が試みられてはいるが(脇田他, 2007)、実際の相談希望や問題の深刻度などとの関連で作られたものではない。また、現在開発中の発達障害関連支援ニーズ把握のための質問紙(2種類、計74項目)は、幅広い支援ニーズを網羅するように作られている一方、内容的に類似した項目もあり、短縮版を

作成する余地が残されている。

以上のことから、これらの短縮版を作成することにした。短時間で幅広い支援ニーズをカバーするような質問紙を開発することで、早期の予防的介入が可能になる。

作成にあたって、学生達の相談希望や問題の深刻度、さらには将来の困難の予測可能性について、実際の学生相談臨床を通して把握した結果を項目選定基準に利用することで、「必要最小限」の項目から構成される質問紙を開発する。

## 3. 研究の方法

### (1) 対象者

1年生を対象としたUPI-RS、ASD 困り感質問紙、ADHD 困り感質問紙それぞれの、過去のスクリーニングデータを用いた。

### (2) 質問紙と項目選択手続き

#### ASD 困り感質問紙

ASDのある人が経験しやすい困りごとを項目とした、25項目からなる質問紙である。困っている程度について「0 困っていない」「1 少し困っている」「2 困っている」「3 とても困っている」の4段階で評定する。最後に、項目に関することで相談を希望するかどうかを「1 相談を希望する」「2 相談するべきかどうか迷っている」「3 相談を希望しない」で回答する項目を設けている。

項目の選択は、相談希望の有る群と無い群で得点を比較し、差が大きいものを選択すると同時に、広汎性発達障害の診断基準も参考にしながら項目を選択し、因子分析によって25項目版と同様の因子構造が確認できるよう、選択項目を調整した。

#### ADHD 困り感質問紙

ADHDのある人が経験しやすい困りごとを項目とした、49項目からなる質問紙である。関連の支援ニーズを把握するための質問紙である。困っている程度について「0 困っていない」「1 少し困っている」「2 困っている」「3 とても困っている」の4段階で評定する。最後に、項目に関することで相談を希望するかどうかを「1 相談を希望する」「2 相談するべきかどうか迷っている」「3 相談を希望しない」で回答する項目を設けている。

項目の選択は、ASD 困り感質問紙の場合と同様に、相談希望の有る群と無い群で得点を比較し、差が大きいものを選択すると同時に、注意欠如多動性障害の診断基準も参考にしながら項目を選択し、因子分析によって49項目版と同様の因子構造が確認できるよう、選択項目を調整した。

#### UPI-RS

精神的健康度のスクリーニングテストであるUPIを4件法にした、60項目からなる質

問紙である。当てはまる程度について「0 まったくそうではない」「1時々そうである」「2しばしばそうである」「3 いつもそうである」の4段階で評定する。最後に、現在悩んでいることで、カウンセラーに相談したいと思うことがあるかどうかを「はい」「いいえ」の2件法で回答する項目を設けている。

項目の選択に関しては、

- (a)相談希望のある学生とない学生との得点。
- (b)総合健康安全センター利用経験がある学生とない学生との得点差。
- (c)自殺企図および未遂者とそうでない学生の得点差。
- (d)自殺完遂者(5名)が全員0以外を選択した項目。

以上の4つの指標に加え、臨床場面での有用性を考慮に入れて項目を選択した。

#### 4. 研究成果

UPI-RSは25項目、ASD困り感質問紙は13項目(対人尺度5項目と自閉尺度8項目)を選んだ。

ASD困り感質問紙短縮版は、25項目版と同様の因子構造を示した(最尤法、プロマックス回転。因子間相関： $r = .76$ )。各下位尺度の内的整合性(クロンバックの $\alpha$ )はいずれも十分な値を示した。

ADHD困り感尺度10項目とADHDの二次的障害に関係している「対人・情緒」尺度を加え、短縮統合版とすることにした。

ADHD困り感尺度の短縮版を含めた、下位尺度間の相関は中程度から高い値であった。

最終的な短縮統合版の項目数は51項目となり、短時間で精神的健康度と発達障害関連の困り感についての調査が可能な質問紙となった。

高得点者を抽出するルールを作成し、高得点を示した者および相談希望があった学生に連絡を取り、研究代表者である総合健康安全センター精神科医師、カウンセラーが個別面接を行った。発達障害の診断のある学生における得点について検討した結果、発達障害関連の困り感が診断のない学生よりも高いことが明らかになった。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計2件)

山崎勇・高橋知音・時田 真美乃・鈴木 彦文・不破泰(2014) 精神的健康および発達障害関連の支援ニーズと援助要請行動との関連。CAMPUS HEALTH, 51(2):187-192 (査読有り)

山崎勇・高橋知音・岩淵未紗・小田佳代子・徳吉清香・金子稔(2012) UPI-RS, ADHD・ASD困り感質問紙の短縮統合版の試作。CAMPUS HEALTH, 49, 3, 67-72. (査

読有り)

[学会発表](計6件)

山崎勇・高橋知音・小田佳代子・榛葉清香・金子稔(2014) 学生生活困り感質問紙の3年間のデータからみた本学工学部学生の特徴についての検討。第52回全国大学保健管理研究集会。2014.9.4, 慶應義塾大学三田キャンパス西校舎ホール(東京都・港区)

高橋知音・岩淵未紗・山崎勇・小田佳代子・榛葉清香・金子稔(2013) 発達障害関連困り感質問紙とUPI-RS短縮統合版質問紙の作成。第51回全国大学保健管理研究集会。2013.11.14, 長良川国際会議場(岐阜県・岐阜市)

山崎勇・高橋知音・小田佳代子・榛葉清香・金子稔(2013) 大学生の精神的健康度および発達障害関連困り感と援助要請行動との関連。第55回日本教育心理学会総会。2013.8.17, 法政大学市ヶ谷キャンパス(東京都・千代田区)

岩淵未紗・小田佳代子・高橋知音・山崎勇・徳吉清香・金子稔(2012) ADHD困り感質問紙短縮版の作成。第50回全国大学保健管理研究集会。2012.10.18, 神戸ポートピアホール(兵庫県・神戸市)

山崎勇・高橋知音・岩淵未紗・小田佳代子・徳吉清香・金子稔(2012) 工学部におけるUPI-RS短縮版, ADHD・ASD困り感質問紙短縮版の得点の検討。第50回全国大学保健管理研究集会。2012.10.18, 神戸ポートピアホール(兵庫県・神戸市)

岩淵未紗・小田佳代子・高橋知音・山崎勇・森光晃子・金子稔・鷲塚伸介・上村恵津子・山口恒夫(2011) ADHD困り感質問紙の尺度構成。第49回全国大学保健管理研究集会。2011.11.10, 海峡メッセ下関(山口県・下関市)

[図書](計2件)

高橋知音・岩淵未紗・須田奈都実・小田佳代子・山崎勇・榛葉清香・森光晃子・金子稔・鷲塚伸介・上村恵津子・山口恒夫 2015 発達障害関連困り感質問紙実施マニュアル(第2版) 三恵社(非売品) 74頁

高橋知音 (2012) 発達障害のある大学生のキャンパスライフサポートブック 学研 240頁

#### 6. 研究組織

(1)研究代表者

金子 稔(KANEKO, Minoru)  
信州大学・学術研究院医学系・講師  
研究者番号: 50571858

(2)研究分担者

高橋 知音(TAKAHASHI, Tomone)

信州大学・学術研究院教育学系・教授

研究者番号：20291388

山崎 勇(YAMAZAKI, Isamu)

信州大学・学術研究院工学系・助教

研究者番号：80554576